CLOSE UP クローズアップ

人形劇を通して、笑顔の輪を広げたい

2007年10月　住吉人権文化センター「はじめての腹話術講座」にて

「子どもが大好き。わぁっと集まってくれるのが嬉しくって」と声を弾ませる中津川多津子さん（60）は、人形劇歴26年のベテランだ。長年の経験を生かし、10月に開かれる人形劇の大イベント「大阪国際人形劇フェスティバル2008」に企画委員として参加。「プロの舞台を、多くの子どもたちに見てほしい」と準備に奮闘している。

◇人形劇がライフワークに◇

2人の子どもが幼い頃、大阪市西区の市立こども文化センターに通っていた。「たまたま人形劇の講習会があり、これなら私にもできるかなと思って通い始めた」のが人形劇人生の幕開けだ。

講習会終了後、そのメンバー11人で「人形劇団ベル」を結成。同センターのワゴン車「こどもクラブ号」に乗って市内の幼稚園などを回り、ボランティアで人形劇を上演していた。

あるとき、終演後にサインを求められ、はっとした。「子どもにとって、プロもアマも関係ないんやな。これやったら、本気でやらないと子どもたちに申し訳ない」。プロの講習会や舞台に通い始め、芸や感性を高めることに力を注いだ。

◇笑顔が活動の源◇

研究心は少しも衰えず、今も熱心に研鑽を積む。人形劇だけでなく、エプロンシアターやパネルシアター、腹話術、マジックなどもマスター。親世代らを対象に、人形の作り方や腹話術を教える教室を受け持つなど、多忙な毎日を送っている。

その原動力は、いろいろな笑顔に接することで生まれてくる。「中学生の子が駆け寄って来て、『私な、小学生の時おばちゃんの人形劇見てんで』と伝えてくれたことがある。覚えていてくれたことがすごく嬉しくて、やっていて良かったなと思う瞬間だった」

今もまだ、勉強したいことがたくさんあるという。「学んだことを生かして子どもたちに楽しんでもらうことはもちろんだけれど、何よりも常に自分も楽しんでやっている。それが一番大事なことやと思う」

◇プロが集結する一大フェスティバル◇

3年前の「大阪国際人形劇フェスティバル2005」で、“猫の手隊長”の役を任された。裏方スタッフとして奔走し、子どもたちが世界の人形劇に触れられる貴重な機会を支えた。この成功が今年のフェスティバル開催に結びついた。

アマチュアの100近い人形劇団で応援団「大阪国際人形劇フェスティバル2008を成功させる会」を結成し、その事務局長も務める。6月にはプレ企画「浪花ふれあい人形劇まつり」を行い、500人を超える親子連れらが来場。本番に向けて開催への機運を高めた。

今年のフェスティバルでは、ユネスコから世界無形遺産宣言を受けているイタリアの「オペラ デイ プーピ 劇団クティッキオ」と日本の「人形浄瑠璃文楽」をはじめ、13の人形劇団が共演。ワークショップやシンポジウム、人形の展示なども行われる。

「初めて子どもが接する生の舞台は人形劇と違うかな。私らアマチュアの身近な人形劇もいいけれど、プロの人形劇はやっぱり違う。1人でも多くの子どもたちに見に来てもらいたい。私自身もすごく楽しみ!!」と弾けるような笑みを浮かべた。

（文・江中咲紀／表紙写真・高島悠介）

プロフィール

「人形劇団ベル」代表

中津川多津子（なかつがわたづこ）さん

1948年大阪市東住吉区生まれ、住吉区在住。82年、市立こども文化センター主催の「人形劇講習会」修了後、受講者11人と「人形劇団ベル」を結成。現メンバーは4人。大阪市こども文化協会理事、大阪市人形劇連絡会代表。

【大阪国際人形劇フェスティバル2008】
10／24（金）～26（日）大阪市中央公会堂
http://ningyogeki.com/festival01
（詳しくは19ページをご覧ください）